や森を育てる大切さについて、木を生業とする上野さんのお考えをお聞かせください。

U： 人が全ての木を伐ってしまった森は、何もしないまま数年放置しておくと、人が立ち入れない程の藪となってしまいます。オークヴィレッジの敷地は、かつては田畑と里山が一体となっていたところでしたが、人がいなくなると田畑はススキが生い茂り、森は藪となり人を寄せ付けず、獣たちが山奥から下りて来るようになっていました。人が一度手を入れた森は、人が手を入れ続けない限り、健全な森になることはありません。手を入れずに放置しておくと、人間たちが暮らすエリアと獣たちが住むエリアの境が曖昧になり、人里にまで獣たちがやって来るようになってしまいます。

また、こんなこともありました。私たちがこの土地に入った当初は、水道は無く敷地内を流れる谷川の水を飲んでいました。しかし、この土地に来て直ぐに、森の上部で大規模な伐採が行われ、雨が降る度に谷川が濁り、水は飲むことはできず、豪雨では谷川が氾濫し工房に流れ込み、道が寸断される災害も発生しました。その後、植林などで森を整備した今では、雨が降っても水が濁ることはなくなり、保水力が増した森は、洪水を起こすこともなくなりました。

＊＊＊＊＊＊＊

F： 古い神社仏閣の建物を見ますと、これを作った職人たちは、木の癖を見抜いて、ふさわしい木をふさわしい場所に使っているように思います。

この木は何に使うのか、この木のどこを、何に、どのように使うのか、職人たちはどのように見分けるのですか。木を見ると、自然に見えてくるのでしょうか。

U：「適材適所」と言う言葉がありますように、昔から材料の使い方が言い伝えられて来ましたし、木の特徴を活かしたモノが作られてきました。古い家の材料の使い方を見てみると、適材適所に使われているので勉強になります。例えば、基礎の上に置かれて柱を受ける土台には、地面に近く腐りやすいので栗や桧が使われ、柱は家全体を支えるので圧縮強度の高い桧が使われ、広い空間に掛けられた曲げに強い材には松が使われています。家具では、椅子などの曲木には、曲げに適したブナが使われています。

職人たちは、直接いろいろな木に触れ、使っているうちに杢目を見て、この材は、この方向に反るだろうとか、後々撓むことが分かるようになり、使い方を決める判断材料にすることができる様になります。

しかし、まだまだ木には私たちが気付かない多くの可能性があります。これからもその可能性を追求したいと考えています。何せ、木は数億年も前からこの地球に存在し続けていることを忘れてはいけません。

F: 私は学生の頃から山に登っています。最近､特に、地球環境の悪化を感じます。今年の紅葉は、普段より２～３週間も遅かったですし、大雨で崖や山が崩れています。木に長年関わっている人として、地球温暖化の影響を感じることはありますか。

U： 例えば、松枯れが年々高地に移動しています。松枯れの原因とされる「マツノザイセンチュウ」という線虫は越冬することができないと言われ、寒い飛騨では生きられないとされてきましたが、温暖化が進み間近に迫って来ています。

オークヴィレッジ高山本社せせらぎラウンジと周辺の整備された森